

佐賀大が崇城大と合同企画展 60人の個性ぶつかる

佐賀大美術館
・画廊憩ひ

佐賀大学と崇城大学の合同企画展「S—YOU—GA展」が、17日から佐賀市の佐賀大学美術館と画廊憩ひで開かれる。佐賀大生による緻密な作風と、崇城大生ならではのエネルギッシュな色彩に富む作風とがぶつかり合う展覧会になりそうだ。

昨夏、崇城大生らが佐賀大主催の展覧会を訪れた際、九州の芸術文化を盛り上げようと共同開催を呼び掛けた。今回、洋画を学ぶ学生やOB、教員ら両校の計60人が出品する。

佐賀大側は、精緻で叙情的な作風で知られる小木曾誠准教授ばりの筆致の作品が多い。小野智佳子さん(4

年)の「傍らの世界」には、人工的に作られた金魚が森の中にシュールに浮かぶ。女性は人工的な美に見向きもせず、正面を一心に見つめる。「何で回りの世界を見ないの」という思いが垣間見える。

山口亜季子さんの「碧(みどり)」は、名もない白い花が咲きだれる光景をジェッソで表現。何気ない光景を「美しいもの」として取り込んでいる。

3年生も力作がそろそろ。植野綾さんの「見えないけれど」は心象風景を女性の群像で表現。心に潜む複数の自分をイメージしており、籠の女性は、触れられたくない本心を示す。ジャングルジムに複数の子供がいるような練られた構図でシュールレアリスム的な魅力がある。金子万吏さんの「無機の人」からは、社会や未来に対する不安感みたいな若者特有の感情が伝わる。底なし沼のような水中に、無表情のアンドロイドが浮かんでいる。

一方、崇城大側はフレスコ画の第一人者として知られる有田巧教授



小野智佳子さん「傍らの世界」(30、パネルに綿布、白亜地、油絵具)

と、家族の肖像画で知られる熊谷有展教授を含む計27人が出品。エネルギーあふれる色彩や大胆な構図をとった作品が多い。

佐賀大美術館では大作を中心に、画廊憩ひでは小品を展示。企画した小木曾誠准教授は「発展途上の学生ならではの、みずみずしい感性を見てほしい。来館していただくことが、若者の応援につながる」と話している。(藤生雄一郎)

▶「S—YOU—GA展」は17日から22日まで、佐賀市本庄町の佐賀大学美術館と同市天神の画廊憩ひで。入場無料。

▶電子新聞に 複数写真

山口亜季子さん「碧(みどり)」(S30、パネルに綿布、ジェッソ地、ジェッソ、アクリル)

